汝の父と母とを敬へ、答へけるは、是みな我が幼きより守れる者なり、イエス之を聞きて曰ひけるは汝なほ一を缺く、その所有を悉く售りて貧しき者に施せ、さらば天に於て財あらん、而して來り我に從へ、彼れ大に富める者なりしかば之を聞きて甚く憂へたり、（同章十八―二十三節）

宰とあればいづれ高き身分の人であつた從て相當の素養を有し又社會より尊敬せられて居たる人であらう、果して彼は永生を嗣ぐべき途を問うて誠を以て答へられし時直に「之皆わが幼きより守れるものなり」と言うて居る、彼は茲に自己の誇りを感ずると共にイエスの答の餘に平凡なるを怪んだであらう、彼は思うた、若し永生を嗣ぐの條件が普通道德に在るならば余は既に十分その資格を有つて居る者である、又若し其上に何か高尙なる行爲を要するならば余の如

きは完全なる德性を本として必ず之を成就するに適するならむと、かくして彼はイエスの口より宗教の奥義を聞かむことを俟つたのである、然るにイエスの答は又しても意想外であつた、汝猶一を缺く即ち其所有を賣りて貧者に施し而して我に從へと、條件は又も卑近なる事であつた、然しながら難しきことであつた、彼は遂にいたく憂へて實行し得なかつたとある、而して福音書記者は茲に自己の意見をさし加へて「彼大に富める者なりしかば云々」と言うて居る、彼れのいたく憂へし理由は單に彼が財產上の富者なりしが故であらうか、さうではあるまい、彼にして若し曩の稅吏の如き心貧しき人であつたならば如何、彼れのイエスに從ふを得ざりしは財產の富者たりしが故よりも寧ろ心靈の富者たりしが故である、彼をしてイエスの答に對し豪然と「是みな我が幼きより守れる者なり」と言はしめたるその

彼の高ぶりの心が彼を妨げて所有を貧者に施すを肯ぜしめなかつたのである、彼は恐らく心の中につぶやいたであらう、余の所有は決して不義の財にあらず、余の正當なる道德と努力との結果に外ならない、之を故なく貧者に施すに非ずば永生を嗣ぐ能はずとは解し難き言であると、かくて彼は遂に躓いた、彼の德性彼をして躓かしめたのである、神殿にて自己の德行を數へ立てゝ祈りしパリサイの人の義とせられざりしが如くこの宰も亦イエスに義とせらるゝことが出來なかつたのである。

イエスその甚く憂へしを見ていひけるは、富める者の神の國に入るは如何に難いかな、富める者の神の國に入るより駱駝の針の孔を通るは却て易し、(同章二十四、二十五節)

我等は玆に彼の他の言葉を聯想せざるを得ない、曰く、

汝等富める者は禍なる哉、既に安樂を受くればなり(路加傳六章二十四節)

汝等貧しき者は福なり、神の國は即ち汝等の所有なればなり(同章二十節)

富める者といひ貧しき者といふ、之を財產上の貧富の意味に解して意味が通じないではない、然し宰の話はその前後の關係より見るも心靈に於て殊に德行に於て富める者の却てその爲に妨げられ幼兒の如き信賴を神に投げかくるを得ざることの敎訓であると見るがふさはしい、加之右に掲げしと同じ言葉が馬太傳に在りては有名なる山上の垂訓の冒頭語として左の如く記されて居るのである、

心の貧しき者は福なり、天國は即ち其人の有なればなり(馬太傳五章三節)

と。

我等は最早や信仰の弱きを歎かない、却て「わが信仰」なるものゝない事を喜ぶのである、我に人を心服せしむるだけの徳がない、善を行ふの勇氣がない、誘惑を斥くるの力がない、人を愛するの愛がない、我心に平和がない、歡喜がない、希望がない、我心に善き物としては一もなきを發見する毎に我は昔の如くに失望しない、其時我は悲をかへて直に喜となすのである、その時我は罪人なる稅吏の如くにひたすら胸を拊ちて神よ我を憐み給へと祈り得ることを喜ぶのである、その時十字架上のイエスの姿が最も鮮かに我心に映ずることを感謝するのである、是の如くにしてもはや我は失望するの時がない、實に「福なるかな心の貧しき者は」である、彼は心の貧しきが故に神の國を承け繼ぐことを得るのである。

感恩の殘生

キリストの愛我等を强ゆ、我等思ふに一人萬人の爲に死したれば萬人既に死したるなり、その萬人の爲に死したるは生ける者をして以後自己の爲に生きず、己等の爲死して又復活したる者の爲に生きしめんとてなり、(哥林多後書五章十四、十五節)

キリスト世に在り給ひし間日々夜々起くるより寢ぬるまで唯我等を救はむとの愛よりほか何もなかつた、彼は全く自己の爲に生きずして我等の爲に生き給うた、彼に喜びありしか、即ち我等の爲の喜びであつた、彼に悲みありし乎、即ち亦我等の爲の悲みであつた、彼は屢々獨り山に入りて深き祈に耽り給うた、その時彼の口に上りし言葉は「我に」又は「我を」に非ずして悉く「彼等に」又は「彼等を」であつた、

十字架上に於ける最後の祈は其最も代表的なるものである、父よ彼等を赦し給へ、其爲す處を知らざるが故なり（路加傳二十三章三十四節）彼の感謝も亦常に我等の救の爲に喜び給ひし時であつた（馬太傳十一章二十五節、約翰傳十一章四十一節）、彼に又大なる苦みの祈があつた、吾父よ、若しかなはゞ此杯を我より離ち給へ、然れど我が心のまゝを成さんとするに非ず、聖旨に任せ給へ、（馬太傳二十六章三十九節）今我が心憂へ悼めり、何を言はんや、父よ、此時より我を救ひ給へと言はんか、否之が爲に我れ此時に至れるなり、願はくは父よ、汝の名の榮を顯せ、（約翰傳十二章二十七節）唯に之のみではない、十字架上にて天地黑暗となりし後大聲にて呼はり給ひしといふかの有名なる

エリ、エリ、ラマサバクタニ（我神、我神、何ぞ我を棄て給ふや）

の如き彼の最も深刻なる苦痛の迸りであつてその果して如何なる心を以てかく叫び給ひしかは深き研究を要するのである、或は之等の危機に臨みてはイエスも亦自己の事を以て訴へ給はざるを得なかつたのであらうか、「我」、「我」とのみいひて毎時のやうに「彼等」の爲に祈り給ひしものではないやうに見ゆる、然しながらこの貴き祈の意味を解するが爲には彼を我等の立場に置いては大なる謬である、彼の立場に我等を置いて見なければわからない、暫しの隙も無く始終我等の救の爲にのみ心を碎き給ひし神の子イエスの立場に假に我等を置いて見て少しく其心持を窺ふことができる、我等いふに足らぬものと雖も愛する骨肉又は友人の爲にその救はれんことを祈つて心を痛めし經驗がないではない、その時我等の誠を籠め涙を流しての祈にも拘らず愛する者が益々神を離れ暗黑の方へと進んで往いたな

らば如何であらうか、その時我に取て彼の墮落、彼の叛逆より苦しいものはないのである、彼の故に我は胸を抉らるゝのである、彼の故に我は神より棄てられしかのやうに感ずるのである、我の苦みを癒すの途は他ではない、彼が神に立ち歸ることである、惡しき子を有ちたる親の心がそれである、かゝる親が悲みの餘り神よ何ぞ我を棄て給ふやと祈りしと聞いて彼が自己の事を訴へたるものと解すべきであらうか、子故に彼は生き甲斐あるを感ずるのである、彼が「我」といふは即ち彼の子の謂に外ならない、子のそむく事即ち彼の苦痛である、子の棄てらるゝ事即ち彼の棄てらるゝ事である、キリスト三年の證を以てして人は未だ自己の罪と神の愛とを覺らず、却てその叛逆を重ねて遂に神の獨子を磔殺せんとす、此處に彼の堪へがたき苦痛なきを得んや、此處に彼の深き失望なきを得んや、若し聖旨

にかなはゞ此時より我を救ひ給へと祈りて彼は即ち我等の知らざる時に我等自身の最も願はしき事を代りて祈り給うたのであつた、

　我等は祈るべき處を知らざれども聖靈自ら言ひがたきの歎きを以て我等の爲に祈りぬ、（羅馬書八章二十六節）

とはキリスト在世の間より既に實現せられたる眞理である、實に愛の熱火は彼と我との區別を燒き盡さずんばやまない、キリストの心に我等はもはや他人ではなくなつた、「彼等」と呼び給ふ餘裕はなくなつたのである、エリ、エリ、ラマサバクタニと訴へ給ひし時キリストの信仰薄らいだのであるなどと言ふ者は何人である乎、親の心子知らず、自ら子を有ちて初めて之を知る、自己の爲でなく唯愛する人の爲に熱き涙を以て滿腔の祈を獻げたる經驗を有たざる者はキリストの苦みに就て語るを暫く差し控ふべきである。

其在世の間常に此の如く人の凡て思ふ處に過ぐる愛を以て我等の爲にのみ生き給ひ、而して終に其測り難き愛の爲め却て我等の弑する處となり給ふ、而も驚くべきは彼の愛である、事茲に至りて彼はその我等を救ふが爲に避くべからざる唯一の途なることを寧ろ喜び給うたのである、

之が爲に我れ此時に至れるなり、

我が往くは汝等の益なり、（約翰傳十六章七節）

我れ汝等の爲に所を備へに往く、（同十四章十六節）

これ新約の我が血にして罪を赦さんとて衆の人の爲に流す處のものなり、（馬太傳二十六章二十八節）

汝等いま此事を覺らずして我を無きものにせんとす、然しながら我を離れては汝等は孤子となるのである、是我の堪えざるところ、故に

我汝等を捨て、孤子とせず、また汝等に來らん、

我れ父に求めん、父必ず別に慰むる者を汝等に賜ひて窮なく汝等と共に在らしむべし、（約翰傳十四章十六、十八節）

嗚呼、愛し、惡まれ、愈々愛し、遂に殺さるゝや猶捨て置くに忍びず更に慰むる靈となりて再び來り給ふ、その切々の愛、その執拗の愛、その無私の愛、天下何くに又かゝる大愛を見る事を得やう乎、

試に萬國歷史を繙いて開闢以來の偉人、聖人、英雄、豪傑その名は何であれ、人といふ人の胸を探りて見よ、ナザレの工人イエスの抱きたるこの愛だけは古往今來絕對にその類例を發見することができない、之のみは寔に人らしき香の絕えてせざる純乎として純なる愛そのものである、是よりも大なる、是よりも深き、是よりも熱き、是よりも美はしき愛を想像することはできない、若し神が愛である

といふならばこの愛こそは即ち神の愛ではない乎。

かゝる愛を以て我等は愛せられたのである、又愛せられつゝあるのである、我等のその事を知ると知らざるとに論なく斯る愛は我等の有となつて居るのである、而してその絶大の恩惠を我等に知らしめむが爲神は又適當なる時に善き師と善き友とを送りて我等の爲に證人とならしめ給うた、我等は遂に眼が醒めた、十字架上のイエスを主よといひてうち仰ぐことができた、その時より從來想像もせざりし不思議なる恩寵は益々豐かに加へられたのである、又現に加へられつゝあるのである、嗚呼感激すべきキリストの愛！我等彼に酬ゆるに何を以てすべき乎。

我等は知らない、他に方法を知らない、唯彼が其貴き身を我等に渡し給ひし如くに我等の(汚れたりと雖も)身を亦彼に渡すの他を知らないのである、我等をして自己に對する所有權を拋棄せしめ唯キリストの僕として生きしめむが爲に彼は生命までをも捐て給うたのである、彼は御自身の貴き生命を代價として我等を贖ふが爲に提供し給うたのである、然らば即ち我等はもはや既に價を以て買はれたる身ではないか、

汝等は汝等の屬に非ざる事を知らざる乎、そは汝等は價を以て買はれたる者なればなり、(哥林多前書六章十九、二十節)

實にさうである、我等は今や我等のものではない、我等は自己に死してキリストに生きたのである、現在の生命は之れキリストの我等に預け給へるものに過ぎない、既に預け物であるならばその預け主の欲するが儘に使はでは濟まぬではない乎、之を少しなりとも彼の意思以外我が爲に使ふは彼のものを竊むに異ならぬ、彼が如何に欲

し給ふ乎と、それが我が殘生を使用するの唯一の標準である、規矩である、寔に「此後自己の爲に生きず、我等の爲死して又復活し給へる彼の爲に」生くるのほかないのである、さらば現在の生命を我等に預け給へる彼の欲し給ふ處は果して何であらう乎。

實に一切のもの神より出づ、彼れキリストにより我等をして己と和がしめ且その和がしむる職を我等に授く、即ち神キリストに在て世を己と和がしめ其罪を之に負はせず、且和がしむる言を我等に委ね給へり、是故に我等召されてキリストの使者となれり、（哥林多後書五章十八―二十節）

天のうち地の上の凡ての權を我に賜へり、是故に汝等往きて萬國の民にバプテスマを施し之を父と子と聖靈の名に入れて弟子とせよ、（馬太傳廿八章十八、十九節）

神はキリストに由て世を己と和がしめ給ふや直に少數の人を召してその和がしむる職を之に授け給うた、天上天下凡ての權をキリストに與へ給ひしに次で彼の要求し給ひし事は之を萬國の民に證する事であつた、萬人救濟の途はキリストに由て開けたのである、今は此處に人を導く案内者を要するのみである、起ちて萬國の民の爲にキリストの福音を證するの仕事のみが殘つて居るのである、而も「收穫は多くして工人は少し」（馬太傳十章三十七節）、田は色つきて豊なる神の愛はふさふさと穗を垂るゝも人之を顧みずして虛しく飢に泣いて居る、骨肉同胞皆さうである、かゝる間に獨り我等のみ召されて猶暫時の此世の生命を預けられたる所以はもはや疑ふべくもない、今や彼の我等に向て要求し給ふ處は明である、政治、產業、富國强兵乃至社會改良皆可なり、たゞ未だキリストの愛を知らざる兄弟を如何して

よいのである乎、彼等をもすべて我等と同じく召さんが爲にキリストはその貴き血を流し給うたではなかつたか、キリストの命にかけて愛し給ひし彼等を我等が棄て置くことはできない、我等も亦パウロと聲を合せて叫ばざるを得ない、

　若しわが兄弟わが骨肉の爲にならんには或はキリストより絶れ沈倫に至らんも亦わが願なり、（羅馬書九章三節）

と、彼等が救はるゝの途は他にあることなし、我等の證に俟つのである、然らば現在我等に託ねられたる暫時の殘生はいとも貴きものといはねばならぬ、肉體とよ、寔に「肉は益なし、生命を賜ふる者は靈なり」（約翰傳六章六十三節）、然しながら我等の肉體は今やキリストの肢である、

　汝等の身はキリストの肢なるを知らざるか、……汝等の身は汝等が神より受けたる我等の衷にある聖靈の殿にして汝等は汝等の屬に非ざる事を知らざる乎、（哥林多前書六章十五、十九節）

神聖なるかな我等の肉體、之を此世の事の爲に消費して可ならんやである、我等の殘生は寔にたゞ感恩の殘生である、彼が我等の爲にのみ生き給ひし如くに我等も亦彼の爲にのみ生くるの他はない、

　わが生けるはキリストの爲め又死ぬるも我が益なり、されど肉體に在て生けること若しわが工の果を結ぶ根本となるべくば何れを選ぶべきか我之を知らず、（腓立比書一章二十一、二十二節）

唯知る、茲に猶何時までかの殘生を託ねられて世に在る限り聖靈の導くまゝに彼の事業に與ることを得しめられたといふ其事の亦特別なる恩惠であつていひ難き感謝を重ぬるの他なきことを、噫、感謝の爲の殘生あり、而して殘生の爲に又感謝あり、かくて感謝は感

謝を生み世を去る時までその盡くるを知らないのである。

新生　終

大正五年五月二十八日印刷
大正五年六月一日發行
大正九年十二月一日再版發行

定價七十錢

版權所有

著者　藤井武
東京市神田區南神保町十六番地

發行者　岩波茂雄
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷所　秀英舍第一工場
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地

印刷者　中田福三郎
東京市日本橋區本銀町一丁目九番地

製本者　寺島藤次郎

發行所　東京市神田區南神保町十六番地　岩波書店
電話九段一二八〇・一二八一番
振替東京二六二四〇

終